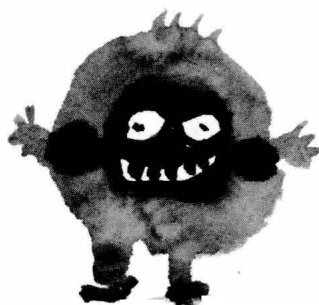


深夜草紙 五木寛之

深夜草紙

五木寛之



朝日新聞社

深夜草紙 PART 5

定価——九二〇円

著者——五木寛之



一九八〇年五月三十日 第一刷

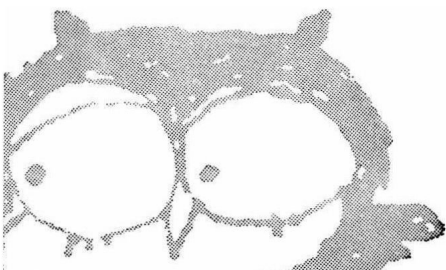
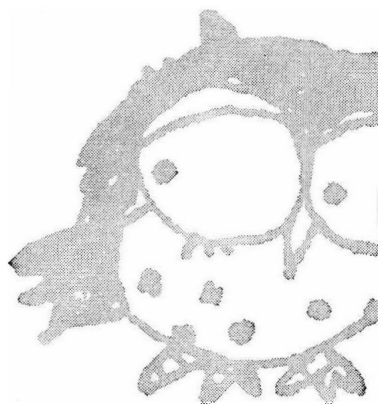
発行者——藤田雄三

印刷所——明善印刷

発行所——朝日新聞社

東京 大阪 名古屋 北九州

© H. ITSUKI 1980 0395-254765-0042



深夜草紙

PART

5



目次

なんでも点数	9
嘘と本当の間	15
わが正月記	27
十二年前の正月	27
映画館に物申す	33
私のコピー読本	38
今年の雪	44
出てこい朝日の……	50
ニューヨークゆき、	61
福岡ゆき、	67
マンハッタンでの会話	73
ぼくの哀傷歌集	81

ぼくの一問一答	88
ぶつぶつ言う	95
失せものたち	100
頭をキタエル	106
体験取材	112
旅の手帖	117
カタラン旅日記	128
マドリッド断章	139
読者からの手紙	144
私の夢日記	149
ロスアンゼルスより	155
清潔な明るい場所	162

記憶のあれこれ	168
瘦せる夏	174
落ちこみの時	180
思い出す人びと	186
歌・音・本など	192
夜明けの歌	199
タンガクの屋 _下 寝	205
昔を今に……	221
少国民の俳優	227
昭和相姦歌	233
講演会の夢	241
雨の誕生日	246

架空座談会 252

病床ニメートル 258

歌は世につれ 264

今週のベスト・スリー 270

今週の一冊 275

今週の本 281

この年の秋 287

そろそろ師走 292

某写真家との対話 298

あとがき

装画——村上豊 装幀——多田進

深夜草紙

PART

5

なんでも点数

ヘグリースという映画を見た。例のトラボルタの踊りを見ようと思って出かけたのである。

これが前作のヘサタデー・ナイト・フィーバーとは、まるで傾向をことにするしろもの。

前者は、ドラマの中に音楽や踊りが組み込まれていて、最後のほうはちょっと困るが、まあ、おもしろい映画だったと思う。

こんどのヘグリース、かなりちがう。つまり一種のミュージカル仕立てになったドラマで、意外にトラボルタの踊りが映画の中で生かされていない。オリビア・ニュートン・ジョンという若い人気歌手も、なんだかつまらない歌ばかりうたっている。

このオリビア嬢、日本人はイルカを殺すから日本へ行くのはいやだと宣言して話題をまいたことがある。

彼女は結局、日本へ来た。その時のインタビューで、イルカのことを聞かれると、ちょっと困

ったような顔をしながら、こんなふうに答えていた。

「イルカって、ほかの動物とくらべものにならないほど知能が高いんです。それに感情も豊かだし、牛や馬を殺すのとは、わけがちがうわ」

これは変だと思う。

知能指数で生物の価値をランクづけするのは、よくないことだとそのとき感じた。頭が良からうと悪からうと、泳ぐのが速からうとおそからうと、そんなことは生物の値打ちには関係がない。彼女の言葉を裏返せば、知能指数の低い動物は殺してもよい、ということころへ行きつく。

そこがおかしい。

どうも勉強のできる子が、できない子を区別してるような気配がある。勉強ができなかったって、別なところですばらしいものを持っている子供は沢山いる。

顔つきも優等生っぽいが、ものの考え方も底が浅い。いくらトラボルタくんが特異な才能の持ち主でも、こういう女の子相手では、おもしろい映画になりっこない。

点数をつければ、さしずめ四十五点ぐらいの映画だと思った。

ヘジョーズⅡも見た。これは三十五点といったところか。前作は、結構ひやひやさせられたのに、今度のはちっともサメが怖くない。三十五点は、ちょっと厳しいかもしれないけど、まあ、そんなところだろう。

「ヘチエイサー」というのを点数してみると、五十五点がいいところだ。アラン・ドロンは、役者としても才能のある人物だが、この映画は感心しない。彼の出てくる作品が、年ごとにつまらなくなってくるのは、まことに残念である。

西ドイツ商品フェア、みたいな催しものが行われていたので、のぞいてみた。

ペリカンの万年筆を、一万円で買う。デザインの古くさいところがおもしろい。書き味は、まあ、八十点といったところか。

以前、札幌で買ったモンブランは、少しペン先が紙になじんできて、かなり使いやすくなった。ドイツものは、しばらく時間がたってこない、その正体がわからないところがある。

ほかにシェーファーのボールペンを使っている。銀色で、やや重いのが難だが、書き味と丈夫さには感心する。これは九十点。

「ヘアバ」のカセット・テープを買った。案外つまらない。やはりあのびっちりしたモモ引き姿で歌うのを見てこそアバである。これは六十五点というところか。ついでに古いタンゴのカセットを買ったが、そっちのほうは八十五点やってもいいと思った。

「ヘコランチル」という胃薬を飲んでいる。丸い小指の頭ぐらいの大きな錠剤だが、きき目は悪く

ないようだ。これを三錠いっぺんに飲み込むのは大仕事である。目下、八十五点あたりに評価しているクスリである。

頭痛薬へ新サリドンへは、旧来のサリドンより少し大きくなり、その分き目がおだやかになったようだ。私としては前のサリドンのほうが迫力があるような気がする。ちょっと点数を上げて、七十五点。

本物のヘカウチン・セーターを買った。

カナダのエスキモーたちが、力を入れてしっかり編みあげた品物だけに、重くて丈夫そうだ。こいつを着ている限り寒さ知らずだ。洗濯の必要なく、雨にも強いという原始的な機能性を買って九十点。

部屋に緑が欲しくて、ヘガジュマルの樹を手に入れた。私を見おろすような大きな鉢植えである。日光に当てないと、すぐ葉が黄色になって散るところが困りものだが、まあ、かなりおもしろい樹である。

私の部屋には、もう三年以上もっているベンジャミナの鉢植えもあるが、今度あらたにくわったヘガジュマルの迫力に押されて、なにやらひよわな樹に見える。このヘガジュマルには八十五点を出しておく。今後の態度しだいでは、もう少し点数をあげる可能性もある。がんば

るべし。

ザ・スーパー・カムパニイのヘザ・クラウンというショウを見に行くつもりでいたが、仕事の都合でどうしても体があかなかった。残念だが点数はつけられない。

以前から本の署名用に、鳩居堂製の「清和」という筆を使っていた。ほかのどの筆よりも、私の手に合っていたからである。

この「清和」が、最近、毛筆部の腰がやや弱くなってきたような気がする。なんだかやわらかすぎるのだ。以前のものは九十点をつけてもいいのだが、近頃の「清和」筆だと、八十五点といったところか。

一九七八年の自分の生活をふり返ってみて点数を考える。

体調、四十五点。

原稿、五十五点。これは体調のわりには、落つことした原稿がなかったのでやや多目につけてある。

麻雀、二十点。月に一回のペースも守れず、結果も散々だった。せっかく名人戦に招待されな

がら出席できなかつたのも残念至極。

仲間に誘われて、一回だけ場外馬券を買ったが、はずれ。したがってこれは○点である。

洗髪も年三回だったから、四十五点ぐらいか。七九年はもっと熱心に髪のを洗うつもりだ。
乞御期待。

(一・五)